

氏名	どい てるこ 土井 輝子
学位(専攻分野)	博士(学術)
学位記番号	博甲第836号
学位授与の日付	平成29年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	工芸科学研究科 先端ファイブ科学専攻
学位論文題目	認知症介護におけるレクリエーションデザイン方法論の研究
審査委員	(主査)教授 桑原教彰 教授 森本一成 教授 鋤柄佐千子 教授 濱田泰以

論文内容の要旨

介護保険サービスの一つである地域密着型、認知症対応型共同生活介護（認知症高齢者グループホーム）は小人数（5人～9人）の家庭的な雰囲気の中で、出来る限り自立した生活が送れるようになることを目指すものである。認知症高齢者グループホームでは認知症に特化して様々な仕掛けを駆使し「認知症」の人ではなく、認知症の「人」として自分らしく笑顔ある毎日を送って頂くことを目的とする。認知症高齢者の介護の困難や負担の大きさから、認知症高齢者グループホームの需要は今後ますます大きくなることが予想される。他の介護保険事業所においては、デイサービスを始めとする通所介護、宿泊を伴うショートステイ、特別養護老人ホーム、老人介護保険施設などの入所施設においても認知症高齢者への質の高い介護の提供が急務である。

そこで本研究では、人が人として尊重しあうという倫理的な考え、及び認知症高齢者のスピリチュアルペインをケアするパーソンセンタードケアという考えに基づき、介護施設での QOL を向上させると共に、介護スタッフの職務満足度も向上することの出来るレクリエーションをデザインする方法論の確立を目的とした実証研究を行った。

本論文は第1章緒論から第7章結論までの7部構成である。第2章では本研究の基盤として、認知症の方の何をどうケアするのかを明らかにした上で認知症に対する援助モデルの構築を行い、第3章以降で構築した援助モデルの有用性を検証した。

第3章では、「お茶のおけいこ」の認知症介護への活用により、他者との関係性の喪失に関わる苦しみをケアする方法を検証した。認知症の入居者の方を対象に入居者の心理的な状態を“おけいこ前”、“おけいこ中”、“おけいこ後”で GBS 尺度を用いて感情面の評価やおけいこ中の発話記録の分析を行った。その結果、GBS 尺度の高い、すなわち周辺症状の重い利用者は、おけいこ中に著しい改善がみられる傾向にあった。この結果から、「お茶のおけいこ」を通して人が交流し、互いを理解することで、第2章で示す援助モデルでの関係存在の危機、すなわち他者との関係を失うという不安をケアすることができたと考えられる。

第4章では、「おはなのおけいこ」について、介護スタッフ、グループホームの入居者の方とその家族が一丸となって取り組むための仕掛けづくりにより、認知症の方の自律存在の危機に関わる苦しみをケアする方法を検証した。結果として「お茶のおけいこ」と同様な効果が得られた。この結果より、「おはなのおけいこ」を通して自分の意志で選択、表現を行うことにより、第2章

で構築した援助モデルの自律存在の危機、すなわち他者への依存という不安をケアすることができたと考えられる。

第 5 章では、コミュニケーションロボットを用いた介護レクリエーションサービスが介護の質に与える効果を、**Dementia Care Mapping** により評価することを目的とした。結果、本サービスが施設利用者への質の高い介護の提供に寄与し、ロボットとの交流が施設利用者には良い影響を与えたことが示された。本サービスにより介護スタッフのレクリエーション運営の負担が軽減され、また運営能力の向上も図られることが期待できる。

第 6 章では、入居者本人の思い出の写真・動画を活用した、認知症高齢者に対するメディアセラピーの効果検証を行った。入居者の生活歴を認知症高齢者やその家族および介護スタッフの三者で共有し、認知症の方の時間的存在を失う事への苦しみをケアすることが目的である。メディアセラピーを実施している間は、入居者本人に精神的な落ち着きが見られた。また、介護スタッフが入居者の生活歴を理解することで、認知症高齢者との関係性が深まり介護スキルの向上もみられた。これらの結果より、メディアセラピーは第 2 章で構築した援助モデルの時間的存在の危機、希望のない自分に対して無意味と感じる不安をケアすることができた。

第 7 章はまとめである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、認知症ケアの現場で重要な役割を果たすべきなのに、しばしばおざなり、時間つぶしの目的で実施されがちな介護現場でのレクリエーションに焦点を当て、認知症ケアとしてのレクリエーションをデザインするための方法論を提案している。申請者はまず認知症の方の苦しみを、いわゆる終末期患者のスピリチュアルペインの概念に沿って分析した。そしてその苦しみを和らげる方法として認知症を対象とするならばこの方法論を提案した。終末期患者に対して他者との関係性を通し、その苦しみを和らげることができるとされている。一方、新たなエピソードを記憶できない認知症の方は関係性の構築が困難である。また記憶を失うことで従来の関係性も喪失する。そこでレクリエーションによる非日常の演出という仕掛けで、認知症の方の情動の記憶に働きかけ関係性を構築し、それを通して苦しみを和らげることとした。この方法論を具体的に、日本の伝統文化であるお茶、おはなのおけいこ、メディアセラピーといったレクリエーションに展開し、いずれも従来にない認知症ケアの効果を確認したことは特筆に値する。またロボットや映像メディア技術を活用することで介護現場の負担軽減にも取り組み成果を上げている。本研究の成果は認知症人口が急激に増加している日本にとっても、また介護現場で認知症ケアに関わる介護職員にとっても今後ますます重要性が増していくと期待される。

本論文の内容は次の 6 報に報告されている。

1. Effective Design of Traditional Japanese Tea Ceremony in a Group Home for the Elderly with Dementia

Teruko Doi, Noriaki Kuwahara, and Kazunari Morimoto

Digital Human Modeling Applications in Health, Safety, Ergonomics and Risk Management: Ergonomics and Health, Lecture Notes in Computer Science Volume 9185, pp.413-422, 2015

2. **Effective Design of Recreation Activities in the Group Home for the Elderly with Dementia**
Teruko Doi, Noriaki Kuwahara and Kazunari Morimoto
Proceedings of the 5th International Conference on Applied Human Factors and Ergonomics AHFE2014, pp.3018-3023, 2014
3. **Assessing the Use of Communication Robots for Recreational Activities at Nursing Homes Based on Dementia Care Mapping (DCM)**
Teruko Doi, Noriaki Kuwahara, and Kazunari Morimoto
Digital Human Modeling Applications in Health, Safety, Ergonomics and Risk Management, Lecture Notes in Computer Science Volume 9745, pp.203-211, 2016
4. **Questionnaire Survey Result of the Use of Communication Robots for Recreational Activities at Nursing Homes**
Teruko Doi, Noriaki Kuwahara and Kazunari Morimoto
Advances in Affective and Pleasurable Design, Advances in Intelligent Systems and Computing 483, pp.3-13, 2016
5. **Case Studies of the Service Quality Improvement in the Nursing Home - Media Therapy for understanding the History of Life of Residents –**
Teruko Doi, Yoshihiro Niki, Noriaki Kuwahara, Yuka Kato, and Jin Narumoto
The 1st International Conference on Serviceology, pp.221-224, 2013
6. **Reminiscence Video as the Tool for Sharing the Life History of the People with Dementia between Care Staffs**
Teruko Doi, Miyuki Iwamoto, Noriaki Kuwahara, and Kazunari Morimoto
The 4th International Conference on Serviceology, pp.67-72, 2016

以上の結果より、本論文の内容は十分な新規性と独創性、さらに社会的に大きな価値があり、博士論文として優秀であると審査員全員が認めた。